

---

# 街娘勇者の憂鬱

星椋歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

街娘勇者の憂鬱

### 【コード】

N9384X

### 【作者名】

星掠歩

### 【あらすじ】

おいら、遊び人。もう旅にも飽きたし、前にこの街で見かけた可愛い女の子を探そうか。なのに、うーん、誰もそんな子知らないって言うし、どこ行ったんだろう、あの子……えっ？ 勇者になったの？

「ふあゝあ、これからどうすっかなあ……」

おいら、遊び人だ。魔物を退治するって連中と何度か旅をしたこともあるけど、必ず何日もたたないうちにクビになっちまう。さっきも場の雰囲気や和ませようと戦闘中に服を脱いだら、武闘家の女の子に激怒されて、パーティーを追い出されちまった。

「まったく、魔物だって和んでたじゃんかよ……」

「俺はレベル20の遊び人だ」って言えば職に困らない、そんなうわさを聞いて以来、おいらはこんな調子であちこちを旅しながらいるんなパーティーに参加したり脱退したりを繰り返している。だけど、それももう限界みたいだ。さっき、『詐欺に注意』って書かれた張り紙に、おいらの似顔絵が描いてあるのを見かけた。

「いいさ、適当にやってくさ。二度とあんなことするかよ」

気ままに旅ができて、衣食に困らなくて、和気あいあいとした楽しい仲間たちと出会える。そんなイメージで気軽に登録したギルドだったけど、ゼーンぜん。実際は何度も死にかけるような危険極まりない生活だった。

「この街……ここに住むかな……あつ、そういや」

この街には以前も何度か寄ったことがある。街の入り口にはとびきり可愛い女の子がいてさ。

「ようこそ。ここは水と森の街、ハイブルグです」

って言いながら笑いかけてくれたんだ。話しかけるとなぜか体中の傷が癒されるってんで、旅人達はみんなあの子に話しかけてたっけ。あの子、まだいるかな……デートに誘ってみようかな……。

くく

「……はあ」

あの子はいなかった。誰に訊いても「そんな子はいない」って返事ばかり。おつかしいなあ……すごく有名だったはずんだけど。まあ、仕方ないか。もう夜も更けたし、おいらは木の上で夜を明かすことにした。なんせ一文無しだから。

「ぐう……」

心地よい眠りに身をゆだねていると、木の下の方で音がする。

がさっ！ がさがさっ！

「……ん……誰だよ……こんな夜遅く……」

葉の生い茂る枝々から下を覗く。あれ……あの子……。

「おーいっ」

「……ひっ……」

おいらは持ち前の身軽さであっという間に木の下に降りると、その

子の前に立った。間違いない。あのとびきり可愛い街娘だ。ひどく怯えてるけど、驚かしちゃったかな。

「ごめんごめん、おいら、木の上で寝てたんだよ」

「……………あ……………あ……………」

「物音がしたから、ちょっと降りてみたってわけさ。怪しいもんじやない……………って言っても信じてくれないか。大丈夫、何もしないよ」

「……………あ……………」

女の子はブルブル震えている。まいったな……………そんなに怖いのかな。よく見ると、その子の手には長ナイフが握られていた。まずい……………かな。

「さ、刺さないでくれよ！ 何もしない！ いや、ほんと！ 大体、君は道行く冒険者をみんな癒してたじゃないか！ 傷つけるなんてことはできないだろ？」

「……………へ……………今、何て……………」

女の子はおいらの言った事を聞くと、ますます激しく動揺した。

「いやね。おいらも君に癒してもらったことあるからさ。街の入り口に立ってたろ？」

「……………あ……………ああああー！！」

女の子はいきなり大きな叫び声をあげると、ナイフを投げ捨て……………

そして。

「え？ ちょー！ー！」

おいらの胸に飛び込んで激しく泣き出した。

「なー！ー！」

自体が飲み込めない。おいら、何か泣かすような事言っただけ……。

「え……と」

話しかけようとすると、女の子はおいらにしがみつき、ますます激しく泣き出した。

「たすけて……ください……おねがい……たすけ……て……」

「えーと……おいらは何を助ければ……」

「た……すけ……て」

彼女はしばらくまともに話せそうにない。まあ……いつか。おいら暇だし。彼女を少しだけ抱きしめると、華奢な体は今でも震えている。うーん、なんか役得のような、面倒に巻き込まれているような……どっちだろう。

〵〵

彼女は長い間泣き続け、ようやく落ち着いた。いや、今でも泣いてるけど、さっきよりはましだ。

「それで、どうしたの？ いきなり泣き出しちゃってね」

「私の事……覚えていて下さったんですね……」

「そりゃ……まあ」

「私を……どうか、この地獄から救ってください」

「はあ……よくわかんないなあ」

何度も何度も同じようなやりとりをして、長い時間かかったけど、ようやく彼女は語り出した。

くく

「娘。高い魔力を持っているな」

私の前で、大きな体の男の人が言った。この人は、さっき私に話しかけてくれた人だ。

「お前の笑顔を見ると、全ての体力、魔力が回復するのだ。世界中で評判だぞ」

「そうなのですか？」

私はただ、旅人の方々に、この街を楽しんでもらいたいだけ。

「娘。私と来い。魔王を倒すには、お前の力が必要だ」

突然、男の人が私の手を引いた。そばにいた戦士様が言う。

「喜びなさい。このお方は魔王を倒す勇者様だ」

「そ、そうおっしやられましても……」

半ば強引に連れ去られた私は、僧侶として冒険に加わることになった。最初は戸惑いばかりだったけれど、めぐる街々で人々の喜ぶ顔を見て、私には使命があるのだと悟った。

だけど。

「いやああああー!!」

勇者様は死んだ。私の目の前に戦士様の首が転がっている。仲の良かった魔法使いの女の子は、私と一緒に魔物たちに弄ばれていた。

「うぐ……っ!!」

四股をもがれ、腸を引き裂かれ、息も絶え絶えの私を魔物たちがなぶり尽くした。それは永遠とも思える時間。事切れる寸前、私は思った。ああ……ようやく楽になれる……。

くく

「おお勇者よ……死んでしまうとは……なさない……」

誰かの声が聞こえる。気が付くと、私は王の間にいる。

「勇者よ、魔王を倒すのだ」



王様は私に向かい、力強く言われた。

くく

私は、勇者になっていた。

私が知っている勇者様は、なかったことになっていた。皆が私を勇者様と呼ぶ。街娘だったころの私を覚えている人は、誰もいない。何が起こったのかわからない。ただ、私は、死ぬ前とは違う時間を生きていた。

「ああ……どうしましょう……」

人々が私に期待をかける。私のパーティーは、不思議と順調に成長し、名を上げていく。私の意に反して、私は魔王を倒す使命を背負わされていた。そして。

「いやああああ……!」

私は死んだ。もう思い出したくもない。魔物たちに凌辱し尽くされ、何日も、何十日も苦しみを与えられ、そして、ようやく殺してくれた。

くく

「死んでしまうとは……なさけない……」

この声は悪魔の声。何度聞いただろう。いつも結果は同じ。何をしても。戦っても、逃げて、隠れても、すべて結果は同じだった。

凄惨な凌辱、そして死。なぜか私は同じ時間を繰り返していた。私は無限に続く地獄の中にいた。

いえ、ひとつだけそこからほんの少し逃れる方法を見つけた。

「……………ぐ……………」

私は自分の胸にナイフを突き立てる。殺される前に死ぬこと。これが私が楽に死ねる唯一の方法だった。

「死んでしまおうとはなさない」

もちろん、私は何度も蘇えり、いつも死ぬ。それでも、とにかく私はあの地獄の死から逃れる術を知った。

自死もとても怖い。恐ろしさのあまり死に損なうこともあった。そんな時には、魔物が瀕死の私を抱えて連れ去り、やはり凌辱を加えるのだった。

「死ななきゃ……………うまく……………死ななきゃ」

失敗は許されない。安らかな死か凄惨な生か。いつもナイフを突き立てる瞬間は怖くてたまらない。体が震えてしかたがない。冷や汗が止まらない。だから、少しでも落ち着きを取り戻すために、死ぬ時は私が愛したこの街で……………ハイブルグで……………。

）

「へえ」

何だか冗談でも聞いているような気分だ。こんな体も小さくて可愛い

子が、勇者なんてさ。それも、何回も死んでるらしい。まっ、冗談を言ってるようには見えないけど。

「あなたが初めてなんです……以前の私を覚えていて下さった方は……」

「そっか。おいら、何で君の事覚えてるんだろっちなあ」

「きつと……きつと……あなた様が本当の勇者様なんです!!」

「え？ おいら？ いやいやいや違う違う!!」

必死に否定した。おいら、詐欺師扱いされてる遊び人だぞ。まいったな。女の子は目をキラキラ輝かせながらおいらをまっすぐ見つめている。

「勇者様！ どうか哀れな私をお救い下さい！ お願いします！ お願いします！」

おいらの前でひれ伏して懇願する女の子は真剣そのものだけど、どうすりゃいいんだ。勇者って、魔王を倒しに行くんだろ？

「……ん〜……デートしてくれたら……考えてもいいかな」

まずは緊張をほぐさなきゃな。そのためには仲良くなる必要があるんじゃないか。デートデート！ こんな可愛い女の子、彼女だったらいいなあ……。

「はい！ 喜んで！ 勇者様にお誘いいただけるなんて！」

女の子にオーケーをもらった。やったね！

「でも……あの……明日は……私が……その……死ぬ日で……」

女の子がつつむき、また震えだした。

「へ？ そうなの？ ったく……魔物の奴、ジャマスンナヨナ……」  
おいらがそつつぶやいた、その時。

「う……ああああ……」

女の子が突然胸を押さえて苦しみだした。

「ありや、どうしたの？」

驚いたおいらが女の子に駆け寄ると同時に、彼女が体を大きくのけ反らせる。

「おおう……ないすばでい……」

いや……そんなことより……女の子の胸のあたりから黒い影が立ち上り、空に駆け上がり、広がった。

「……伝説の呪文を使う人間がいたとはな……」

影が何か言っていた気がするけど、おいらの注意は女の子にくぎ付け。そのうち影は消えてなくなった。

「ん……」

女の子がゆっくり目を開ける。抱きかかえるおいらにっこりと笑いかけ、言った。

「何だか、いい気分です」

「びっくりしたよう……まあ、明日の事はさ、デートしながら考えようよ」

「はい」

デート場所と時間を決めると、おいらは忘れないように手帳にそれをメモした。

「あ……その書……」

女の子が驚いたような声を上げた。

「ん？ ああ、これ。どこかで拾ったんだけどさ。見たいていう奴がいるから持ってたのに、見せた瞬間『お前には必要ない』ってさ。もったくないから手帳にしてるのさ」

「あ……あの……どこに持っていかれたのですか……」

「えーと、どこだっけ……ドーム……いや、ダメだったか……」

おいら、記憶力はからきしなんだ。可愛い女の子の事以外はね。

「なんかさ、えらそうなおっさんが『お前はまたレベル1だ』とか

言つてさ。そもそもレベルって何だよ。ほんと、冗談じゃないよ」

おっと、女の子に愚痴は禁物だ。嫌われちま……あれ？

「ああ……」

なんか女の子の様子がおかしいぞ。さっきよりも目を輝かせて、顔まで赤い。

〃

デートは楽しかったなあ。結局女の子には何も起こらなかった。おいら、からかわれたんだろうな。ただ、街のみんなはやっぱり女の子の事を勇者だと言っていた。

「ほら、やっぱりおいらは勇者じゃないよ。だって、君が勇者じゃないか」

女の子は、勇者と呼ばれるのがよっぽど嫌なのか、しょんぼりしている。

「そうですね……」

「魔王、倒しに行くの？」

「嫌です」

「でもさあ、勇者が倒さないとさ……何となく、そんなお約束だし」

「じゃ、じゃあ……」

女の子が決心したようにおいらに言った。

「一緒に行ってくださいますか！」

「……ま、いつか」

この子との旅も悪くないな。おいら、絶対役に立たないけど。ダメだったら二人でどこかで暮らせばいいさ。おいらは一人で妄想にふけり、女の子が言う事は何も耳には届かなかった。

「これからも、よろしくお願いしますね。賢者様」

……いやぁ……こんな可愛い子と旅することになるなんて。前のパーティーをクビになってよかったなぁ……おっと、これからは脱いだりするのはやめとこつと。

「このご恩は、決して忘れませんわ」

女の子がおいらの腕にしがみついた。こんな態度も、おいらが無能だってバレるまでだろうけどね……たはは。

(後書き)

ファンタジー習作、微妙に某ゲームのネタ



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9384x/>

---

街娘勇者の憂鬱

2011年10月26日05時13分発行